
weed sky, weed revenge

すねいく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

w e e d s k y , w e e d r e v e n g e

【Nコード】

N 9 2 8 1 F

【作者名】

すねいく

【あらすじ】

日ごろいじめを受け続けていた翔、誠司、彩香は結束し、自分達の未来のために復讐を誓う

始まり

プロローグ

2011年7月24日 日曜日

「や、迎えに来たよ」

目の前に立つかつて共に”戦争”を企てた戦友。

「フフ。久しぶりね」

その横に立つ、幼馴染にして戦友。

ああ、久しぶりだ。

久々のシャバの空気。・・・うん、悪くない。

自然と笑みが浮かんでくる。

「久しぶりだな、誠司。彩香」

こうして2人を見ていると高校生のあのときの事が蘇って来る。

2007年6月28日 土曜日

楠見第2中の体育館裏。

俺はいじめを受けていた。

「なあ、ほかに何か獲物もってねーか？」

腹を思いつき蹴り飛された。

正直・・・、痛エ・・・。

「おら・・・よっ！」

何かの棒で背中を殴られた。

もう痛みをあまり感じない・・・。

「なあ、こいつ反応無くなっただけだ」

「そっか、じゃあ、帰るか」

そのまま、奴らは去っていった。

正直・・・、動けね・・・。

「大丈夫!？」

誠司か・・・。

「まあ・・・、なんとか」

「ちよつと待つて応急処置するから」

別にいらね・・・。

ああ・・・。殴られていただけだが、これではつきりまとまった。

「翔?」

俺が立ち上がるのに合わせて誠司も立ち上がった。

「復讐するか」

俺は常々思っていた事を口に出した。

「え、復讐? 本当にするの?」

何を疑問に思っているのだろう。前にも話したことがあるだろうに。

「うん・・・。僕も協力するよ」

「ああ・・・。これからは俺たちの時代だ・・・」

いつの間にか傷口の痛みを忘れ、ただ、興奮するばかりだった。

始まり（後書き）

初めての作品ですので、何かおかしいところがあるかもしれません
が・・・、そのときは指摘していただいて結構です。その方がう
れしいので

距離

2007年6月30日月曜日

大きくも無く、小さくも無く。裕福でもなく、貧乏でもない。
それが、俺の家。

俺の家のすぐ隣には幼馴染の彩香が住んでいる。

小さい頃引越してきた時に彩香と出会った。

二階の自分の部屋を決める時も彩香の部屋の横を選んだのだ。
いつでも話が出来るように。

その頃は純粹に、彩香という友達が好きだった。

目覚まし時計がやかましく鳴り響く。

ああ・・・、毎度毎度うるせー・・・。

だったら初めからセットしなければ良いだけの話なのだが、それ
では朝起きる事が出来ない。

目覚まし時計を止めて着替えを始める。

痛ッ・・・。

服を脱いで体を見る。

あいつらも慣れているのか、痕が残っているのは腹や背中だけで
顔などの目立つところは痕が残っていない。

その方が俺としても楽なんだがな。

「・・・と、早く着替えないとな」

誰かに言うわけでもなく、とりあえず声に出して自分を促す。
って、痛いって！

「やつほー、翔。どうしたの？」

軽くうずくまっつてると窓のほうから声。

彩香か・・・。

「いや、なんでもねえよ」

「ホントに？随分と痛がつてるように見えたけど」

「こついうときはお節介焼きというか・・・。」

「なんでもねえって。それより、着替えなきゃ行けないし、これから学校だろ」

「んー・・・、まあね。・・・休みたいけど・・・。」

「ん？なんだって？」

「ううん、なんでもない！じゃあね」

変な奴・・・。とりあえずさつさと着替えよう。

痛いのを我慢しつつ、着替えて一階へと降りる。

トイレに行き、顔を洗い、テーブルへと着く。

重い。

それがいつも思う感想。

両親の仲は特に悪いわけでもない。

両親との仲も特に悪いわけでもない。

ただ、最近父親の様子がおかしい。

その所為もあるのだろうか、朝食時の空気が非常に重たい。

さつさと食べて学校に行こう。

大きくも無く、小さくも無く。裕福でもなく、貧乏でもない。

それが、私の家。

私の家のすぐ隣には幼馴染の翔が住んでいる。

小さい頃引っ越してきた時に翔と出会った。

二階の自分の部屋を決める時も翔の部屋の横を選んだのだ。いつでも話が出るように。

その頃は純粹に、翔という友達が好きだった。

うつすらと目を開く。

まだ目覚ましが鳴る時間にはなっていない。

ここの所随分と早く起きちゃうな。

する事も無い。一階で寝てるお父さんもお母さんもまだ寝てるみたいだった。

とりあえず顔を洗って、着替える。

ここの汚れ、まだ取れてなかったんだ。

いつの間にかセーラー服についている汚れ。

日に日に酷くなってるし、いつまで隠し通せるかな・・・。

どうせこのまま寝る事も出来ないし、制服をきれいにしよう、うん。

小さな汚れをふき取り、糸のほつれがあれば裁縫セットを使い、少しずつ時間が過ぎていった。

ふと隣の家で目覚ましの音が鳴った。

翔かな？

カーテンを開く。翔の部屋は窓は開けてるくせにカーテンは閉めてる。

何するのか見物でもしよう。

何気なく見ていたが、普通に着替えているようだった。

ただ、痛がつている点を除いては。

声をかけた。

案外普通に返答が戻ってきた。

二、三会話をして互いに部屋に戻った。

私のこと、気づいてくれたら良かったのに。

私が苦しんでいるって気づいてくれた良かったのに。

でも、翔も私と同じように苦しんでるんだよね。

それに耐えてるんだよね。

見ればわかる。

だけど、見ればわかるのに、どうして互いに気づきあうことが出来ないのだろう。

無理なものと判つていても悲しくなつてきて涙が出てきた。

どのくらい時間が経つたのか、気づいたらいつも家を出る時間になつていた。

行きたくない。

正直に言つて、行きたくなかつた。

お母さんの急かす声が聞こえたので、とりあえず着替えて顔を洗つて歯を磨いた。

「それじゃ、行つてきまーす」

「あれ？ご飯は？」

「時間がないからいらない」

そういつて家を飛び出す

「彩香、最近様子が変なのよ」

「そうなのか？」

「制服が変に汚れてたり・・・、いじめでも受けてるのかし

ら」

「ふとした拍子に汚したんだろ。お前は気にしすぎだ」

「そうだといいいけど・・・」

そんな会話が家でされてる事にも気づかずに。

あれ？翔？

私が家を出るちよつと前に翔も家を出たのかな。

そう思い、近づいて声を掛けようとする。

あれ・・・。どうして足が動かないんだろう。

近づきたくても近づけない。

あれ・・・。どうして声が出ないんだろう。

声を掛けたくても掛けられない。

あ、そうか。

気づいた。

気づいてしまった。

私は気付き合えなかった事で今まで以上に翔との距離を感じたんだ。

翔は何も悪くない。

何も話さずに分かり合うことなど無理だと判っているのに。

声を掛けるのを諦め、トボトボと歩き出す。

頬を温かいものが滴り落ちる。地面に斑点を作っていく。

あれ？なんだろう？

どうして泣いているの？

だめ・・・、止まらない・・・。

そのまま回りを気にせず大声で泣いた。

騒ぎを聞きつけたのか、少し先を歩いていた翔が走り寄ってきた。

必死に声を掛けてくれる。でもその声は私には届かない。

いや、私が拒否してる。

だめ、これ以上翔に優しくされるわけには行かない。

逃げ出したい衝動に駆られた瞬間、私は走り出した。

どこでも良い。どこでも良いから。翔が来ない場所に。

とりあえず俺は何もしていない。それだけは確信を持って言わしてもらおう。

はつきり言って、どうして彩香がいつの間にか後ろを歩き、いきなり泣き出したのかわからない。

慌てて駆け寄ったは良いが、どこかに逃走。

・・・俺が悪いのか？

ああ、やばい。早く学校にいかねーと。

顔を見れば判る

2007年6月30日 月曜日

彩香のことを少し気にしながら楠見第2中の校門に入った。

電車がつい先ほど着いたのか、最寄り駅から学校までは通学者の嵐だ。

鬱陶しいなあ・・・。

とりあえず、玄関に入ろうとする時。

「お、翔じゃん」

ん、この声は。

「誠司じゃん、おはよー」

「うん、おはよう」

それより、誠司がこの時間帯にいるって事は・・・、

「なあ、あいつも近くにいてるんじゃないのか？」

「うん、いるよ」

こいつあつさりと言いやがった・・・。

「でも大丈夫大丈夫。こんな人気の多いところで手出ししないって」

そうだと良いけどな。

少し気にしつつも玄関で靴を履き替えようとする。

「よお、久しぶりだな。もう大丈夫か？」

ゾクッ・・・。

「よう、久しぶりですねー」

またこいつか。今までの事が思い出してくる。

早く立ち去りたい。

「今からちよつと時間あるか？」

時間無くても連れて行くだろうが。

とりあえず巻き添えが食わないように誠司を先に行かせた。

「45分からホームルームが始まるだろ」

靴を履きながら答える。

さて・・・、これからどうしようか。

「俺らコーコーサーだぜ？多少の遅刻は何もいわねーよ」

ああ、やっぱり意味が無かった。

周りを見渡す。

薄情なやつらばかりだ。

巻き添えを食らいたくないのは誰でも一緒か。

「しゃーねー。そこにいる人影も気になるし、こいつに付き合ってやるかー」。

「ああ、良いぜ」

「へえ、今日はいつになくやる気があるじゃねーか」

「たまには、な」

真っ向から受ける気なんて無いけど。

「今日は体育館裏に数人ほど呼んであるからなあ。こうなるならもう数人連れて来たら良かったよ」

こいつ卑怯過ぎだろ。

「ま、お前なら1人でもすぐにノビちまうだろうけどな」

「だったら初めから連れて行かなければ良いだろ。他のやつを探せよ。」

「おら、着いてこいや」

仕方ない。せこい方法はあまり好みじゃないが、

「判ったよ」

「さり気なく後ろに回られたな。やっぱりこっそり逃げるとか無理かなあ。」

「と、相手が俺の後ろにいてるということは、普通俺は逃げられないと思う。」

「つまり、それを逆手に取れば、普通俺は逃げられないわけだから、相手は油断してる確率もある。」

さっきの態度を見てても、俺が逃げないと思い込んでそうだし。現に今まで逃げたことはほとんど無いからな。

「なんて……。素直に行くと思うか、アホが！」

一言罵倒し、即座に逃げる。

奴も咄嗟の事だったようで一瞬隙が生じた。

目指すは、信二の下へ。

さっき靴箱から見かけた人影は信二のものだ。

「待てやあ！」

ああ、くそ。

少しずつ詰められてる。

あと少し、あの曲がり角。

何とか曲がり角を曲がり、信二とすれ違う。

俺は無視して階段を上がって上に駆け上る。

このまま上に行けば俺のクラス。

誠司もいてるはず。

ふと、駆け上る際、下を見ると、

こけたのか、起き上がったからこちらを睨み、辺りに当り散らしてる。

小さい人間だなあ。

なんて思いながら、信二を探した。

こかしたのは信二だろうが、信二がいてないってことは、うまく逃げたのだろう。

まだホームルームが始まる直前ということで廊下に出てる生徒も多い。

助けてくれたお礼に後でジュースでもおごってるやるかな。

教室に入った俺がまず目にするのは教室の後ろのほうで遊んでる奴ら。

時間は8時40分。

遊んでいる・・・いや、これもいじめだろう。

片方は楽しんでるが、もう片方はどんな風な見方をしても楽しんでるようには見えない。

席に着いて鞆から午前中に使う教材を机の中に放り込んだ。

8時45分。先生が来てホームルームを始める。

「ホームルーム始まるから早く席に着け。特に後ろで遊んでる奴ら」

先生、あれが遊んでるように見えるんですか。

いじめられてた奴は席に戻ろうとするが、いじめてる側はそれを許さない。

先生の忠告はあまり意味がないみたいだ。

先生もそれ以上はあまり咎める気がしないのか、それ以上は言わなかった。

朝の報告を適当にやってそれで終わり。

職員室に帰っていた。

所詮はこの程度。何の役にも立ってない。

中には良い先生もいてる。面倒見の良い先生や、正義感の高いよな先生。

でも、大半は給料だけをむしり取るような先生だろう。

ただすることだけして終わりっていう先生はそんな言われ方を仕方ないと思う。

授業が始まるのは9時から。

まだ時間もあるから暇なわけだが。

「翔。あの後大丈夫だった？」

「おお。何とか撒いた」

「すごいじゃん。どうやったのさ」

「そうだな、それについてはまた追々話すよ。俺はちょっとトイレに行つて来る」

「もったいぶるなよな。じゃ、行つてらっしゃい」

誠司は信二の事知らないし、後で言つた方が面白そうだ。

ちなみに、この棟には男子トイレは1個しかない。

1階と3階は女子トイレ。2階に男子トイレ

横の芸術・クラブ関連の教室のある棟には逆の配置。

男子トイレで、奴に会わなければ良いけど。

トイレの中に入る。その時、目の前の人から話し声が聞こえた。

「お前体育館裏に連れてくるって言ってたじゃねーか」

「わりいわりい。逃げられてよ」

「ったく。おかげで俺ら、無駄に遅刻して減点対象になっちゃまったよ」

「悪かったつて。次は連れてくるからよ」

「おう、期待してるわ」

やばっ。

隠れるところは・・・個室だよな。

「あぶねえ」

思わずつぶやく。

人違いだったら良いけど、あの後姿は絶対に奴だ。

ちなみに俺は名前を知らない。聞く機会も、耳にする機会も無いからだ。

別に知りたくもないけどな。

そう思いながら、そろそろ立ち去ったと思い、ドアを開ける。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・おい」

何でバレてんの!?

いや、マジで。えーと、なんで?とりあえず目が合ったから閉めてみたけど。

「他の奴らは居なかったみたいだけど」
どうしよう。

「おら、開けろや」

時間を確認、55分。まだ時間あるな。

ああ、くそ。最悪だ。

何でバレたんだろう。

いや、そんなことは今はどうでもいい。

もう一度開けてみる。

「・・・・・・・・」

やっぱりいるよね。

「・・・・・・・・」

バタンッ

「てめっ！」

俺の身軽さなめるなよ。

便器の上に足を掛けて、隣の個室に乗り移る。

上に隙間が開いてある所に体を刷り込ませる。

よし、何とかいけた。

「あん？隣に移ったのか？」

やべ、勢いよく・・・開ける！。

バタンッ！

「いつてえー！何すんだ！さつきといい・・・ツツツ！」

鼻は痛いだろうな。狙い通り。

ドアを思いつきりぶつけたのが利いたのか、追ってくる気配も無

く、俺はそそくさと逃げ出した。

ああ・・・、結局俺は何のためにトイレに行ったんだ？

余談だが先生が来る直前に席に戻る事ができた。

もちろん誠司には言っていない。

昼休憩。12時20分

「翔。昼ごはん食べよう」

「ん。ああ・・・、そうだな」

「どうしたの？」

「今日は俺、学食だからさ」

「というか、ここにいてると奴がいきなり出てきそうで怖い。」

「僕もそうだよ。じゃ、行こうか」

「そうか。行くか」

芸術・クラブ棟の方へ行き、1階にある食堂へと向かう。

また、そこでもいじめは普通に行われてる。

歓声を上げる者もいるが、大半はそこを避けて、食事をしていたりする。

「居心地悪いな」

思わずつぶやく。

誠司もあり良い気分はしないようだ。

適当にパンを買って、食堂を後にする。

・・・が、いじめられてる対象を目に入れてしまった。

「信二だ・・・」

「え、誰？」

ジュースをおごってやるって言ってたからな。

「ちよつと先に中庭に行ってる」

「うん？わかった」

500ミリペットボトルのジュース。

フルーツの類のもので、ちよつとズッシリしてる。

信二の場所は・・・あそこか。

いじめっ子は・・・一人だけ、あそこか。

「あの時の借り、今返す・・・ぜっ！」

ペットボトルを投げる。寸分変わらず狙い通り。

頭に命中。

数瞬停止してる内に俺は逃げる。

中庭に向かうか。

「翔お帰り。結局なんだったのさ」

「すぐわかるよ。仲間が居ないと不安だろ？」

そろそろ信二が来てくれてもいいが。

「食べようぜ」

「そうだね」

と、食べて知らばくしない間に、信二が来た。

「来た来た」

「こんなところに居たのか、さっきはありがとな」

「なあに、今朝のお礼だよ。ついでにそのジュースもな」

そう笑いながら話していると、

「ねえ、誰？さっきの信二って人？」

誠司は知らなかったな。

「そうだな、なんていうか・・・」

一拍おいて、

「信二であり・・・、俺たちの新たな同士ってところ？いや戦友か」

言った。

誠司の驚いてる顔面白いな！。

「今更そんな驚く必要も無いだろ。2人だけでやっていけるわけ無いんだし」

「そうだけど・・・。何で言ってくれなかったのさ」

「昨日仲間に入ったんだよ。今朝言おうとしたけど、ごたごたがあつたからなあ」

「そう・・・か」

すぐに言わなかったのは悪いとは思うが、今はそんなことを言うてる場合じゃない。

俺がずっと気にかかっていたこと、今朝の彩香の様子。

学校に行けば必ず会えるはずだ。

時計を確認する。12時35分。

昼休憩終わりの時間は12時55分。

後20分。

「悪い。これから用事あるから先出るわ」

「え、僕たちも一緒に行こうか？」

「いや、一人でいい」

「わかった。気をつけて」

「ああ、お前らもな」

恐らくこの時の顔は怒っているような、悲しいような、そんな表情をしてたと思う。

教室棟に戻る。

目の前にある、1年の教室

彩香の教室は1年1組だったな。

教室を見渡す。

あれ？いない。

「なあ、彩香どこにいるか知らないか？」

ドアの前に立っている女子に話しかけた。

「彩香・・・？今日は来てませんけど」

「は？来てない？そんな事はないだろ」

「いえ、今日は来てませんけど・・・」

どういうことだ。

「あの、あなた、中島翔さん？」

「そうだけど」

「はじめまして、私佐島聡美と言います」

「はあ・・・」

「ちよつとこっちに・・・」

なんだ？っていうか、何で俺のこと知ってるんだ

「彩香、いつも他の女子にいじめられてるんです。やってる事は小さいことなんですけど、落書きや、靴を隠したり、輪ゴムを飛ばしたり・・・」

「・・・」

「彩香も反抗したら余計に危なくなるって判ってるのか、何もし

なくて、でも、ずっと続けられて・・・」

ああ・・・、やっぱり

「私も下手に手を出すこと出来なくて・・・」

「知ってるよ」

「え、どうして？親にも、誰にも言っていないって彩香が・・・」
そんなことは簡単。

「そんなの、彩香の顔を見ればわかる。小さい頃からずっと一緒にいてたんだ。確認付けたくて今日はここに来たんだがな・・・」

「そうですか。翔さん、彩香がいつも話しとおりの人ですね」
彩香が？

「今いないんだったら仕方ないや。また出直すよ」

「はい、また来てください」

手を振って別れた。

ひとつ判ったこと、

彩香が学校に来ていない。

今朝は一緒に・・・、っていう表現はおかしいが、学校に向かっていたはずだ。

やはり、あの後どこかに行ったのだろうか。

教室に戻ると、誠司は読書をしていた。

適当に誠司に話をし、誠司の制止を聞かずに教室を飛び出していた。
った。

靴を履き替える。

玄関に出ようとするとき、

「てめえ！あの時はよくもやりやがったな！」

げっ。何でこいつがいきなり出てくるんだ！

「うるさい！今はお前なんかに構ってる暇は無いんだ！」

あんな奴無視。っていうか、おとこの傷は癒えてないんだ。話したくも無い。

「ああ！？お前早退すんのかよ！」

遅刻しても構わないって言った奴に言われたくねえ！

「じゃ、俺も早退しよう」

「なんでそうなるんだ！」

構ってられねえ。

走り出す。

「待てやつ！」

追ってきた。

構わず走る。

しつこいよ！

そんなことより彩香が何処に居てるのか探さないと。

どこか思い当たる場所・・・。

泣き出したのは家をでて間もない時。

一番近くて良さそうな場所・・・。

ゲーセン？

いやいや、彩香はそんなところには行かない。

・・・公園。

小さい頃いつも彩香と遊んでいた公園。

「あそこしかない」

そこに向かおうと足を向ける。

ふと後ろを見る。

まだ追ってきてるよ・・・。

何とか振り切ってから行くか。

「ああ？スピードあげてんじゃねえ！」

「うるっさいな！」

喋っても息切れが激しくなるだけじゃ。

「てめえ、待て！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言を貫く。

「無視するんじゃねえ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お前なんかにも構ってられない。

「て……め……。くそ……。っ」

息切れか。馬鹿だろ。

その間に俺は全力で走り、振り切った。

そして、公園に着いた。

案の定、彩香を見つけた。

昼過ぎと言う事もあるのか、公園には誰も居ない。

もつとも、この時間帯に制服でうろついてたら補導の対象なんだが。

何て言えば良いんだ。

何か気休めの言葉を言えば良いのだろうか。

場を和ませようとしたら良いのか。

俺は

「彩香……。」

声を掛けた。掛けずには居られなかった。

報復

公園

「彩香・・・」

誰かが私の名前を呼んだ？
きつと幻聴よね・・・。

「彩香・・・！」

やっぱり聞こえる・・・。

振り向くとそこには・・・、

「翔・・・」

どうして、ここに？

「お前学校行ってないだろ。クラスのやつに聞いたよ」

翔が、私のクラスに？どうして・・・。

「名前は何て言ったかな・・・。佐島、佐島聡美って奴」

ああ・・・、サトちゃんか。

「何もしてやれなくて・・・、ごめんな」

「それは、気づけなかった事？気づいていたら何か出来たって言うの？」

自分でも思うくらい卑しき感情。翔は何も悪くないのに。どうしてこんな事を・・・。

「何があつたのかことくらい知ってるさ」

「そう・・・。サトちゃんが言ったんだ・・・」

どうして翔にそんなことを・・・。

あれ？私は翔に知ってほしいと思っていたんじゃないか・・・。
知ってほしいのか、知ってほしくないのか・・・、自分でも良く

わからない。

「まさか。詳しいことを聞いただけで、気づいていたさ。．．．
彩香」

じゃあ．．．、じゃあ、どうして．．．。

どうして、気づいていながら何も言ってくれないの。

気づいていながら．．．、どうして．．．！！

「彩．．．」

「うるさい！」

翔の伸ばしてきた手を払いのけた。

「どうして．．．？どうして、知っていて何もしてくれないの．．
．？どうしてよ．．．！！？私のことはどうでも良いの！？」

翔は何も悪くない。翔に当たる何て．．．、八つ当たりだ．．．。
もういやだ、こんな自分．．．。

「ごめん．．．。翔は何も悪くない．．．。ごめん．．．」

不意に泣き出してしまった。

ああ．．．、恥ずかしいところを見せてしまった。でも、今は構
わず泣いてい

たかった。

「彩香．．．、ごめん．．．」

手を差し伸べてくる翔、

「何かしてやりたかったけど、何か出来る自信が無かったんだ．
．」

そのまま手を後ろに回して、

「ずっと前から気づいていたのに．．．、庇ったりしたら俺も報
復を受けるん

じゃないかって．．．」

そつと、優しく、抱きしめてきた。

「そんな報復を恐れて何も．．．」

普段の私なら絶対に真っ赤な顔をして、動揺してたと思う。
でも、今はそんな翔の行動が私をとて落ち着かせた。

「これからは俺たちが報復をする番だ」

「どういうこと？」

私たちが報復をする？そんなの無理に決まってる。

「同志を集めて、皆で仕返しをするんだ」

「仕返し・・・」

「ああ」

「この生活から解放・・・」

「ああ」

「本当に、出来ると思ってるの？」

正直、信じられない。

「出来るさ」

「根拠は？」

「ええと・・・」

ほら、すぐ詰まる。

「いつも向こう側は数人に対して、こちらは一人だ。だったらこ
っちは向こう

の人数を上回ればいいんだろ？」

なんて単純・・・。

「そんな連中は全国人何万人も居てるんだ。簡単に集まるさ」

単純だけど、出来そうな・・・。

でも、どうせなら・・・。

「うん、判った。どちらにしても、このままって言うのはイヤだ」
出来るところまでやろう。

「ああ。さあ、こんなところで座ってないで、学校に・・・、い
や、サボるか

」

「そうだね」

それにしても、天気が悪い。

雨が降りそう。

「雨が降りそうだし、どこか行くか」

「そうね」

天気は悪いけど、折角気分が晴れてきたって言うのに……。
「やっと、見つけた」

「てめえ……」

何でこんな時にこいつがやって来るんだ。

「さつきはよくもやってくれたな」

「うるさい。お前が勝手に追いかけてきて、息切れして、拳句、人を見失ったんだろ？」

「うつせえ！お前こそ学校を飛び出したかと思っただら女と公園で会いやがって

！」

「それがどうした」

「お前の所為で俺は先輩に怒られたんだよ！」
「どうでも良いよ。」

それにしてもこいつ……。

「なあ、お前、あの先輩らとつるんで楽しいか？」

「ああ？た、楽しいに決まってるだろ！」

やはり、どもった。

「お前、本当はあいつらから抜け出したいとか思ってるんだじゃ無いのか？」

俺、もしかしたら他の奴らもこいつからされることは無くなるかも……。

「うるせえ！」

「ッテエ！」

クソッ……。普通いきなり殴るか。

「翔ッ！」

「こつちに来るな！」

彩香に巻き添えを食らわすわけには……。

「お前に、何がわかるんだ！」

こいつ、何を口走って……。

「俺が好きで人をいじめてるように見えるのか！」

いってえ……。でもな……、

「でもな……。ああ、見えるさ！お前が好きで人をいじめてるようにな！」

「ふざけるな！人を好きでいじめてるわけあるかあ！」

良かった……。これが聞けたら後はこつちのもんだ。

これは……。雨か……。

ついに雨が降ってきやがった。

「俺だつて、脅されて、人をいじめさせられてるんだよ！」

「だからつて……。俺に当たるなあ！」

「つつ……」

「お前の所為で、どれだけ的人数が苦しんでると思ってるんだ！」

許せない。例えばさせられていたとしても、許せるわけが無い！

「お前が、あいつらの言うことを聞いていた所為で、一体何人の人が……！」

「イッテ……。わっかんねえよ！そんなこと！」

わからないだと？

「わかってるだろ！お前が、お前が今されてることと同じだろうが！お前もあ

いつらにいじめられてるんだろ！お前もよくわかってるんだじゃ無いのか！」

「……。」

ツテエ……。やっと殴るのを止めてくれた。

「そうさ……。俺が良くわかってる……。でも……。俺に

何ができるっ

て言うんだ!」

あつぶね……!

「確かに俺はあいつらを恐れているいろいろやったさ!俺に選択肢があつたとしても

言うのか!？」

「その選択肢!作ってやるよ!」

「なに……?」

「あいつらに報復する!」

「報復……?」

「そうさ。何人も同志を集めて、全員で仕返しをするんだよ」

「そんなこと……。そんなことが、出来ると思ってるのか!？お前はあいつ

らを知らないからそんな事を言える!夢見てんじゃない!」

「ッ……!」

腹が……。

「所詮お前らみたいなのが何人集まったところで……。報復なんざ、出来る

訳がねえ!」

頭が……。重い……。

「うる……。せえ……。!やってみるのが怖いだけだろ……。一人で何でも

かんでも背負い込みやがって……」

「……」

無言で殴るなよ……。腕が……。

「ハア……。ハア……。だから……。俺たちの……。元へ……。来い!

あんな奴らにいつまでも付き合う必要はねえ!こっちへ……。一歩踏み出せ!

」

息が……。クソッ……。あともう少し意識が持てば……。

「今日は、この辺にしといてやらあ……」

待てよ……。待てて……。ここで返事も聞かずに逃がすわけには……。

「じゃあな。彩香……。だっけ？そいつの看病しといてやってくれ。勢いに乗

ってやり過ぎてしまったからな」

「え？うん……。わかった」

意識が持たねえ……。

頭がいてえ……。ここは……？

「あ、起きた？翔」

「彩……。香……。？」

「そうだよ。すっかり良い天気になったねえ」

天気？さつきまで曇っていたのに……。

そういえば……。

「アッ！あの野郎は！？」

「え、どこか行ったよ？何かあまり怖い人じゃない感じになってた」

怖くなかった……。？

そうか……。良かった……。

ところで……。これは……。

「って、膝枕？」

「うん」

……。……。

「どうしたの？」

「なんでもねえ……。もう少しこのまま居てて良いか？」

「うん。勿論」

どうせ、体もうまく動かないしな・・・。

「今、何時ごろだ？」

「今5時ごろだね」

・・・・・・・・・・・・・・・・。。。

「5時!？」

「あ、そんな急に起きたら・・・」

「イツテエ!!」

「寝てなさい」

「はい・・・」

「5時って事は、ずっと俺寝てたのか」

「うん、さっきので随分と疲れたんだね」

「みたいだな」

それにしても、周りには人っ子一人居ないな。

普通公園でこの時間って言ったら小さい子供や親子連れが遊びに

来てるものじ

やないのか？

その事を言ってみると・・・、

「元々は居たよ？でも、何か・・・、私たちに気を使ってかココを離れてた・

・・・」

「・・・そうか」

恥ずかしい・・・。

でも、今は大した事じゃない。

今はとても・・・、

「清々しいな・・・」

「うん、そうだね」

報復（後書き）

すみません、激しく遅れてしまいました。

言い訳としては、学業（あまりしてないけど）やクラブ（こっちは頑張ってる）で忙しいもので、体力が持っていませんでした。

毎週日曜日あたりに投稿を目標としてますので、一応
よろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9281f/>

weed sky, weed revenge

2011年2月3日02時46分発行